ソウル出身の若手イム・ジヨンによる「ドラゴネッティ」と先ほどのベイルマンとの共演。２挺の楽器の音色の違いが曲想と相まって各々の個性が相乗効果を上げる。チャイコフスキー《メロディ》の叙情的な旋律などイムの奏でる「ドラゴネッティ」が艶やかだったし、ブラームス「ヴァイオリン・ソナタ第２番」はイムによる「サセルノ」がまた違った叙情味を生じさせる。明度が増したぶん、作品の感触も変わる印象。萩原もヴァイオリンの質感や表現に的確に合わせ見事だ。最後はショスタコーヴィチ「２つのヴァイオリンとピアノのための５つの小品」。「エングルマン」（ベイルマン）と「サセルノ」（イム）の“競演”。オリジナル曲ではないが曲の面白さがそのまま楽器の違いや特性を際立たせ、興味深いものがあった。（齋藤弘美）

concert

バッティストーニがバイエルン州立歌劇場で《トスカ》を指揮

10月31日、バイエルン州立歌劇場でアンドレア・バッティストーニが指揮するプッチーニ《トスカ》を聴いた。2010年リュック・ボンディ演出の再演だが、バッティストーニの音楽づくりは初演時の指揮者以上に満足感を与えた。彼自身も、ヴェルディ《椿姫》を振ったときよりオーケストラを掌握していた。「この歌劇場管弦楽団は音楽に没頭してくれるので指揮するのは至上の幸せ」と終演後に熱く語ってくれたが、彼の棒から音が紡ぎだされるような密な部分の間に、中弛みしてしまう箇所もあるので、未だ伸びしろを感じさせる。

題名役のアニヤ・ハルテロスはこの役が求める声の色を獲得し、彼女のイタリアンレパートリーのなかで一番合っていると思える。バッティストーニと歌った体験は、今後この役をより成熟させる役に立つだろう。カヴァラドッシのステファノ・ラ・コッラは、このところ「声を響かせる職人」のような方向へ進んでおり、バッティストーニの指揮の恩恵は少なかったが、第２幕以降は観客を満足させた。スカルピアのジェリコ・ルチッチは好演したものの、声に緊迫感がない。

当歌劇場の観客はバッティストーニの健闘をそれほど讃えておらず、「別の男性歌手陣で、小さめの歌劇場だったら」と残念に思った。（中 東生）

concert

ブルガリアの至宝ザハリエヴァのピアノ・リサイタル

2019年は日本とブルガリアが親交を持つようになって110年、正式な外交樹立から80年、戦後の国交回復から60年ということで、“トリプル・アニヴァーサリー記念行事”がいくつか行われた。なかでも「ブルガリアの至宝」と言われ、ブルガリアのルメン・ラデフ大統領夫妻も大ファンだというピアニストのジェニー・ザハリエヴァのリサイタルは盛会だった（10月24日・Hakuju Hall）。

当夜はラデフ大統領がデシスラヴァ・ラデヴァ夫人を伴って来場したため、会場には屈強なSPが立ち並ぶ異様な雰囲気だった。最初にザハリエヴァの愛弟子である保坂佑亮（ソフィア国立音楽院在学）が、生誕120周年となるブルガリアの作曲家パンチョ・ヴラディゲロフの小品から３曲。そしてザハリエヴァによるムソルグスキー《展覧会の絵》。モスクワ音楽院でタチアーナ・ニコラーエワとヴェラ・ゴルノスタエヴァに学んだザハリエヴァの揺るぎない技巧からのさまざまな描写は得難く、ロシア人ピアニストとは異なる表現は実に興味深かった。つまり音楽と言語（母語や文化）の関係性を聴くようでもあり、ブラームスの間奏曲やバラードでの仄暗くも素朴な温かさなどは、ビザンチン建築の採光量にも似ている。ショパンのワルツは５曲続けて演奏され、そのスタイルは古の巨匠の風格。レッスンでは多種多様な表現を弾き示すとのことで、当夜の彼女の変幻の演奏に合点がいった。終演後は大統領夫妻、日本ブルガリア協会理事長・猪谷晶子氏他、大勢での祝宴となった。（上田弘子）

ジェニー・ザハリエヴァ（左）と門下生の保坂佑亮（筆者撮影）

concert

豊かな響きとスケールの大きな《ハンマークラヴィーア》で魅了した小山実稚恵

日本を代表するピアニストの一人、小山実稚恵が2019年６月から行っている全６回のシリーズ「ベートーヴェン、そして…」の第２回（11月16日・Bunkamuraオーチャードホール）。「決意表明」と題して、まさにベートーヴェンの決意が漲る「ピアノ・ソナタ第29番《ハンマークラヴィーア》」を主軸としたプログラムが組まれている。また「そして…」は先輩モーツァルトの作品。二人の違いや影響の濃淡を示唆する内容ともなっている。